

白秋作品紹介

空は鷺津の水あさぎ
名も浜名湖の満潮と
寄するさざなみ 沖つ波
勇む角目かくめの網かけて
船の出入も とんとと おもしろや
とんとと おもしろや

ナボ
齋

昭和1年1月1日

遠つあふみ浜急

らかし真鵠翔
かけ
れり北の昏
くら
きに



巡航船がゆく—自秋が好んだ浜名湖の情景

白秋と浜名湖西岸

白秋は河井家旅館滞在中、本興寺のほか浜名湖周辺や、白須賀、潮見坂、新居などを訪れて詩歌を作った。白須賀では、江戸時代の宿場の風情が残る特徴的な風景を詩や短歌にしている。

浜名湖セレナアデ
町田嘉章作曲 西川鶴吉振付

なにを今切いまぎれ 浜名の橋よ 海は切れても 中絶えぬく
長いドライブ 浜名の橋も わたしや鷺津へ ひとすぢにく
うかとかかつた 新居の関所 縁は今切いまぎれ 湖の端うみのはたく
こころ舞阪 弁天嶋ぬけて ままよ大黒 夏まつりく
浜名よく見ろ 鶩津はこだ しろい燕も トン／＼出てはしる
向う大崎 時雨れよとままよ なまじ日和は 目がかすむく
たとひ沈まうと いとしの鐘よ 見せておくれよ 湖の底うみのそこく
本所 天神松 真下は湖うみよ 浜名 名どころ すぐ一と目く

水の音聴きつつをればこの林泉に満つるこほろぎの声もしづけき
『続本興寺林泉』

白秋と湖西民謡保存会

白秋作詞の「鶯津節」が有名になったのは、白秋の歌詞が優れているとのと作曲の妙味、振り付けのよさも大いに寄与していたが、昭和8(1933)年、全国発表大会で佐渡おけさと同時優勝という華々しい成績を収めたことにもよる。



全国民謡大会出場に向けて、鶯津節の練習 昭和8年7月
(湖西民謡保存会所蔵)

当時、衣装の奇抜さと海上で踊るという珍しい振り付けで、地元では「水上おどり」として親しまれていた。しかし、その後全国的なPRを展開し、有名になった佐渡おけさと対照的に、鷺津節は50年近く注目されることはなかった。

鷺津節の復活のきっかけになったのが、湖西民謡保存会という保存団体が誕生したことによる。

令和4(2022)年は、鷺津節の歌詞誕生から90年の年に当たり、湖西民謡保存会は40周年を迎えた。発足当初、約150人いた会員は、現在15名ほどになったが、白秋が作詞した鷺津節を始め、浜名湖セレナアデ、鷺津新曲と湖西民謡三曲を中心的に白秋民謡の継承に努めている。

小中学生の指導を通して将来に繋げる活動や鷺津節の広報活動を続け、同じ白秋作の民謡や他の民謡保存の団体等との交流を積極的に行い、活発な保存活動を続けています。

遠つあふみ浜名のみ湖冬ちかし真鳴翔れり北の昏きに

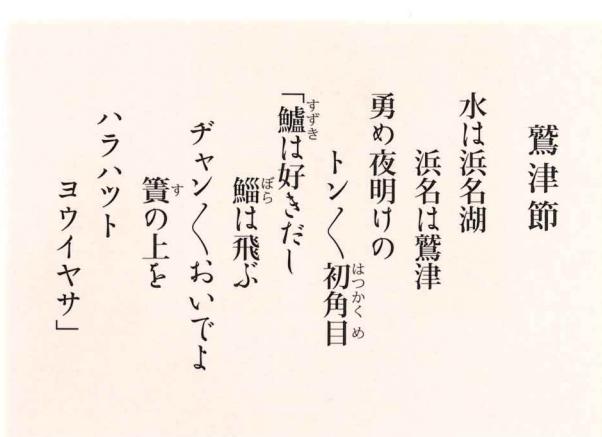


水は浜名湖
浜名は鷺津

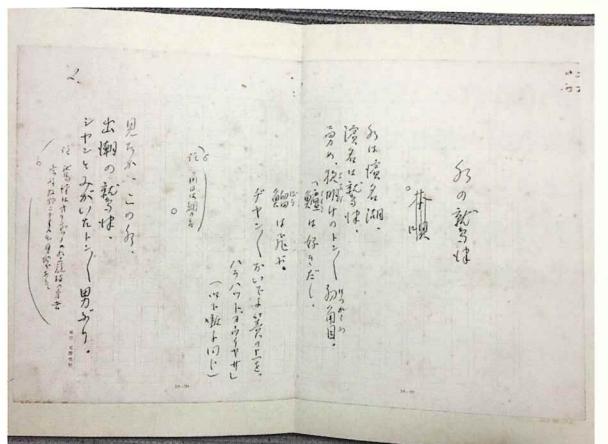
発行 湖西市教育委員会

白秋と鷺津

「旅行はただの一度であった。浜名湖畔の鷺津の民謡や…」にはじまる白秋記録によれば、鷺津を訪れたのは昭和7(1932)年10月のこと。当時の鷺津は、駅前や周辺に工場が建設され、そこで働く従業員を客とする飲食店などが軒を連ね、賑わいを見せ始めていた。さらなる鷺津の発展を模索していた地元の人たちは、当時全国的に流行っていた創作民謡に目をつけた。そこで、縁のあった富士紡績鷺津工場長を通じて民謡の創作を白秋にお願いしたところ、近隣地方で校歌の作成依頼があったこともあり、鷺津への来訪となった。



鷺津を訪れた際に創作した鷺津節
(昭和7年11月17日)



鷺津節（白秋のノート）

白秋は浜名湖の湖岸に立地する観潮樓河井家旅館に滞在した。女将は、白秋のために専用の部屋を用意し、湯殿まで作った。ここで白秋は、一日中、湖を眺めて創作に耽った。

ある時、気分転換によいところはないかという問い合わせに、主人が本興寺を紹介したところ、たいそう気に入り何度も足を運ぶようになった。後の歌集「夢殿」では、短歌49首のうち33首は本興寺のことを詠んでいる。そのほかに、主人は浜名湖周辺や白須賀・新居など各所を案内したそうだ。

白秋は、一度訪れた地を二度と訪れたことはないといわれるが、翌昭和8(1933)年再び鷺津を訪ることとなった。歌集整理のためということで、1月4日から23日まで逗留。白秋が生まれた柳川に鷺津の環境が似ていたため、ともいわれている。



昭和天皇行幸の写真 昭和5年6月
正面奥二階建ての建物が観潮樓河井家旅館
(湖西民謡保存会所蔵)



取り壊し前の
河井家旅館
(平成28年)

白秋と本興寺

白秋が本興寺を訪れたのは、河井家旅館の主人に紹介されて、一緒に訪ねたことに始まる。現在本興寺の書院には、白秋が当時河井家旅館で使用したとされる文机が飾られている。その机越しに庭を眺めるとこれまで眺めていた景色と違うものが感じられる。

たたず
白秋は本興寺の佇まいを好み、後の詩集「夢殿」の中で、「本興寺林泉」と「続本興寺林泉」と称して本興寺に関する多くの歌を残している。

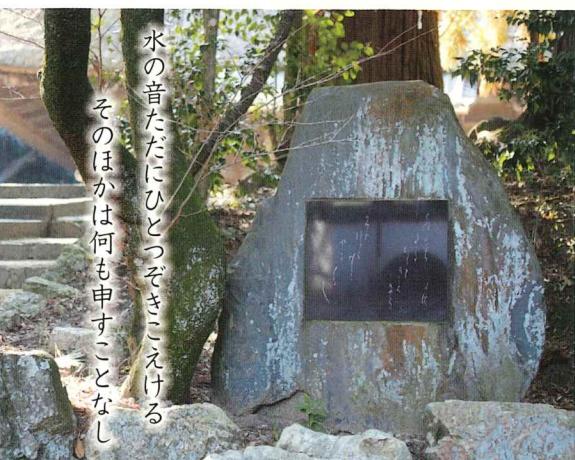
水の音 ただにひとつぞきこえける

そのほかは 何も申すことなし

という歌は、当時の本興寺第四十世日瞻聖人に請われて即興で作った歌であるが、即興にして会心の作という白秋の短歌の中では珍しい作品である。この歌は、本興寺境内に歌碑として建立され、毎年10月に白秋歌碑建立記念として、関係者を中心に鷺津節の披露や短歌作品を募集する顕彰祭を行っている。



白秋愛用の机（本興寺）



白秋の歌碑（本興寺）

湖西に関する白秋の作品

北原白秋略歴	年	年齢	出来事
明治18年 (1885)	0歳	1月25日、福岡県山門郡沖端村(現柳川市沖ノ端町)の海産物問屋に誕生。本名隆吉。	
明治35年 (1902)	17歳	「文庫」に投じた短歌一首が掲載され、選者服部躬治に知られて、歌壇の第一線に立つ。	
明治37年 (1904)	19歳	日露開戦。親友が自殺し、哀傷のあまり詩作にのみ没頭。早稲田大学英文科予科に入学。	
明治38年 (1905)	20歳	長篇詩「全都覺醒賦」が「早稲田学報」の懸賞に当選し、「文庫」にも掲載される。	
大正8年 (1919)	34歳	薄愁の号で「春海夢路」、「絵草紙店」などの長篇詩を発表、文庫詩派の第一線に立つ。	
昭和7年 (1932)	47歳	最初の童謡集「トンボの眼玉」刊行。	
昭和8年 (1933)	48歳	吉植庄亮と浜名湖・鷺津・岐阜・犬山および美濃太田・飛驒高山・平湯などを回遊。	
昭和17年 (1942)	57歳	1月、鷺津に滞在。	

腎臓病・糖尿病が急激に悪化、顔面および四肢の浮腫はなはだしく、呼吸困難の発作におちいり、慶應病院に入院。創作ノートを手放さず、発作の合間にその状況を短歌に表現する。杏雲堂病院に転じて療養。11月2日、「新生だ。」との一語を遺して帰寂。

